

日本でもホームレスの人達が立ち退きを迫られている様子がテレビに映ることがある。「住むところが保障されない」生活とはどのようなものであるかをケニアで見聞きした私は、日本のホームレスの様子を社会の冷たさとして感じていた。日本には、彼らは働きたくないから、怠け者だからホームレスになってしまった、つまり自業自得ではないか、だから立ち退きを迫られても仕方がないのではないかという風潮があるように思う。本当にそういう人もいるかもしれないが、やむにやまれない理由がある人もいるだろう。

ケニアには、首都ナイロビを中心にして名前のあるスラムだけでも10箇所以上あり、その特徴はひとつの町と思えるくらい巨大化し続けていることが挙げられる。学校あり、病院あり、教会ありと町としての機能を果たせるよう、そこに住む人々のたゆまぬ努力が感じられる。政府は立ち退きを迫るが、もうすでに町として機能しており、どうすることもできないのが現状のようだ。ただ、いろいろな人々や団体が彼らを支えていこうとしている気持ちがあることが日本と違う点だと思う。もちろん、日本にもホームレスを支えている教会や個人や団体もあるが、それは広がりを持って多くの人々に浸透している気持ちとは言いにくいと思う。

スラムとは、何なのだろうか？ケニアにあるいろいろなスラムを訪ねてみるうちに、すっかり分からなくなった。定義的には、「無計画に立てられた粗末な家に住む、大量の人々の集まる場所」と言えるかもしれない。それ以上に「社会においてもっとも弱い立場の人々」であると思う。そしてそういう立場に置かれる理由は、本当に彼らのせいだけだとは思えない。私が知るスラムに住む彼らが、働きたくないから、怠け者だからという理由でスラムに住まなければならないとは思えない。きっと、私もケニアのその場所で生まれていたら、スラムの住人に間違いなくなっていただろう。そうなるしか道がない社会の現状が根本にあるのだと思う。

私が住んでいたムロロンゴという場所から車で30分のところに「カソイト」というスラムがあっ



カソイト・スラム

た。地図にもなく、有名でもなく、スラムと呼ぶには小さい場所に数人の家族が住んでいるところであった。私のいた NGO があるとき、そこに住む人々に何かできることはないか様子を聞きに行くことになった。雨季に入ったばかりであったが、道なき道を車で探す。それは、ポートランドという国営のセメント工場の敷地内であった。24時間、265日稼働している工場の全体が見渡せる少し離れたところに数軒のビニールで作られた家が並んでいた。畑では野菜が作られ、鶏が数羽放たれていて、子供たちも集まって遊んでいた。常に工場からの立ち退きを迫られている彼らは、私たちの突然の訪問に驚き、警戒していたが、事情を説明すると温かく迎えてくれた様子だった。

遠くから、子供たちが声を合わせて歌う声も聞こえてくる。声の聞こえるほうへ行ってみると、屋根も壁もなく木の枠だけの場所に子供たち20人くらいが先生を囲むようにして歌を歌っていた。聞けば、幼稚園としてやっているとのことだった。子供たちの元気さと明るさが眩しかった。スラムに住む子供たちの暗い沈んだイメージは全くない。どこにでもいるような元気で明るい子供たちだ。いや、それ以上に元気で明るい子供たちだ。後日文房具を寄付することを約束して、その場を離れた。

そもそも彼らは、ケニアの中でも生活が厳しい北、西ケニアから出稼ぎ目的で家族で移住してきた人が多い。しかし、思ったように仕事に就けず、スラムでその日暮らしをするようになった人々が多い。しかし、彼らは言う。「農村にいるよりはま

し。家族が死ぬことはないから」と。「農村の貧困は、都会の貧困よりも厳しい」という。農村のやせた土地、雨が降らなければ農作物も実らない、仕事も全くない。病気にもなれない、学校にも行けないその悪循環は世代を超えていつまでも続く。そしてついに家族で都会に移住することになる。彼らは言う。「都会ではチャンスがあるかもしれないし、助けてあって生きるチャンスがある。仕事を作り出すこともできるかも知れない」。少しでも、現状を変えていこうという前向きな希望を持ってやってきている。そして、仕事を自分で作りだすなど、ものすごく働き者だ。

私は、スラムで数多くの希望にあふれる前向きな人々の言葉を聞いた。缶やビンを集めてわずかな現金に換えて家族を養うお父さんは「子供は絶対学校に行かせたい」と目を輝かせる。わずかな畑で作った野菜を売るお母さんは、「今日家族が食べれるだけ稼ぎたい。それだけで十分」と笑う。今日を生きて伸びるのに一生懸命な人々が、スラムにはあふれている。地方の農村から出てきても失業率が50%を超える首都ナイロビでは仕事に就くことは簡単なことではない中で、政府が何かしてくれることを期待せず、自分たちなりに考え、出来ることで、助け合ってスラムで生きている。努めて明るく、前向きに生きている。

そんな人々を見ていると、スワヒリ語の‘HARAMBEE’（ハランベ）という歌を思い出す。ハランベとは、スワヒリ語で‘一緒に力を合わせて’

という言う意味だ。

‘Harambee Harambee Tuimbe Pamoja’
(ハランベ ハランベ トゥンベ パモジャ)

=ハランベ、ハランベ、一緒に力を合わせて頑張ろう！

ごみを集めるお父さん、野菜を売るお母さん、屋根のない幼稚園で歌う子供たちの笑顔と声が今でも心に焼き付いている。彼らは、生きる力にあふれていたように思う。

後日、ナイロビにある大きなスラムを訪ねた。スラムの入り口でお菓子を売るお父さんがいた。ひとつ日本円にして30円ぐらいだという。私は、そのお菓子は相場で5円くらいしかしないことを知っていた。6倍もの値段で外国人に売ろうとしている彼。そばにいたケニア人の友達も「高いからやめときな」という表情をしている。しかし、私には彼の後ろにいる彼の家族が見えてくるようであった。奥さんに、子供、そして故郷の農村に住む数え切れない親戚たち。払ってしまえば、30円もあれば一日はなんとかなるだろうことは分かる。しかし、それは一時的な偽善者の振る舞いだろう。

迷ったけれど、黙って払った。次にお客としてくる外国人にとっても良くないことだろうと思う。そのお金では、彼の人生は変えられない、ただ今日一日の彼の生活は少し変わるかもしれない。私なりのケニアでの‘ハランベの気持ち’ではいけないのだろうか？